廃棄物に関する社会・経済学的研究のレビューの紹介

廃棄物学会 社会・経済部会

１．はじめに

今期のテーマのひとつとして、「廃棄物に関する社会・経済学分野の基本的な文献情報の収集」を掲げた。しかしながら、基本文献を定めるのは現段階では困難と考えて、今回は総説・文献レビュー的な論文・書籍を中心に取り上げることとした。

まだカバーできていない論文も多いと思われるが、漏れていると思われるものがあれば情報を更新して行きたいと考えているので、是非社会・経済部会までご連絡いただきたい。

２．廃棄物関係の書籍を紹介した書籍、文献リスト

総説、レビュー論文ではないが、書籍を紹介している本やこの分野の文献リストが掲載されているものを初めに取り上げる。

環境庁(1991)の『リサイクル新時代』には、リサイクル関係文献集として巻末に関連書籍一覧が掲載されている。「ごみ・リサイクル」では石橋多聞(1972)「憂うべきゴミ問題」以下、79 冊がリストアップされている。ただし、リストのみである。また必ずしも学術書ではない。一方、市橋(2000)の『ゴミと暮らしの戦後 50 年史』も学術書ではないが、多数の図書の一部を引用しながら戦後の暮らしとごみを描いており興味深い。

一方、環境法政策学会の学会誌第２号は「リサイクル社会を目指して」と題した廃棄物分野の図書となっており、その巻末に 1971 年以降の文献リストが掲載されている。法学のみならず、経済・政策的な分野の文献もリストアップされている。

その他、これらの図書・文献リストに含まれていない書籍で、80 年代以前の社会・経済部会に関係すると思われる書籍をいくつか挙げておく。

・柴田徳衛(1961)『日本の清掃問題：ゴミと便所の経済学』，東京大学出版会
・カール S.シャウプ(塩崎潤 監訳)(1973・1974)『財政学』，有斐閣
・寄本勝美(1974)『ゴミ戦争』、日本経済新聞社
・華山謙(1978)『環境政策を考える』，岩波書店
・谷口知平ほか編(1983)『ポイ捨て文化への挑戦：京都市空き缶条例の理念と展望』，ぎょうせい

以下、学問分野別に、それぞれの分野における廃棄物研究のレビューを紹介する。

３．経済学分野のレビュー

3.1. 総論

必ずしも文献レビューというスタイルではないが、オーソドックスな経済学の立場から廃棄物問題全般を論じたものにポーター（2005）の『入門 廃棄物の経済学』がある。事例はアメリカのものが中心となっている。

またレビューではなく、文献集になっているものとして、Powell, J.C., Turner, R.K. and Bateman, I.J.の"Waste management and Planning"がある。廃棄物問題、廃棄物管理手段の評価、経済的手法、法的・規制的手法等に関する主要な論文を掲載している。

日本の文献で廃棄物経済学分野を比較的広くカバーしている書籍としては、山本編著(1985)の『現代のごみ問題　経済編』、植田(1992)の『廃棄物とリサイクルの経済学』、細田・室田編(2003)の『循環型社会の制度と政策』などがある。

『現代のごみ問題　経済編』では、１．ごみ問題の経済学、２．地方自治体のごみ処理事業の経営課題、３．廃棄物資源化の経済性と市場の課題、の３部に分けて、それぞれ５～６編の論文が掲載されている。『廃棄物とリサイクルの経済学』では、大量廃棄社会の構造、ごみ行政の効率性・廃棄物処理料金の効率性と公平性、リサイクルの社会的費用便益分析等が論じられている。『循環型社会の制度と政策』では、物質循環に関する２編、循環型社会構築のための法と経済の関係について論じている３編、有害廃棄物に関する１編、環境と経済の両立を中心課題とした２編の計８編の論文が掲載されている。

3.2. 各論

中村編(2002)の『廃棄物経済学をめざして』には、廃棄物産業連関に関する詳細な報告に加えて、

廃棄物問題に関する環境評価研究をレビューした栗山の論文、家庭系廃棄物の発生要因に関する研究例を批判的に検討した高瀬の論文などが掲載されている。なお廃棄物産業連関については、中村(2000)もある。

吉田(2004)の『循環型社会』は、各リサイクル法、および、不法投棄について、既存の主要な研究をもとに書かれており、リサイクル関連法に関する文献レビュー的な性格をもつと思われる。

有料化に関するレビューはいくつかある。Jenkins(1993)は"The economics of solid waste reduction"の２章で有料化の影響に関する既存研究をレビューし、容積ベースとサービスレベルベースの影響の違い、所得やその他の社会経済的変数の影響等を整理している。また Miranda ら(1996)はさらに広く文献を取り上げ、リサイクル参加率の増加、埋立量、発生量の減少、不法投棄等の不適正処理、詰め込み、低所得者への影響、収集事業者の経営への影響、費用構造、集合住宅の費用負担問題、排出者の抵抗、政治的な実行可能性、その他、の論点に分けて論じている。

日本の文献レビューとしては、山川・植田(1996)、山川・植田(2001)などがある。山川・植田(1996)は、制度概要、減量効果・フロー変化、公平性、財源調達、公正性等について整理している。対象は家庭系可燃・不燃ごみの有料化である。これに対して、山川・植田(2001)では、粗大ごみ、事業系ごみについても対象とし、また有料化の経緯、不法投棄や自家焼却、費用負担のあり方、住民合意等についても触れている。

EPR に関するレビューとしては、LINDHQVIST(2000)の３章がある。EPR の概念や意図など、EPR の提唱者とされる LINDHQVIST が学位論文としてまとめるにあたり、整理したものである。また日本では、例えば淺木(2002)が、主として容器包装に関する経済的手法との関係、および、EPR と PPP の関係性についてレビューしている。

４．経営学分野のレビュー

ほとんど既存研究がないという指摘ではあるが、一応、既存の研究を概観しているものに長沢・森口(2003)の『廃棄物ビジネス論』がある。１章において、廃棄物処理事業、および、その事業経営についての研究がないことを、廃棄物学会誌や環境経済・政策学会、環境経営学会の学会誌、あるいは既存書籍などを概観して述べている。若干の研究の紹介がある。

５．心理学分野のレビュー

環境配慮行動の規定因に関する研究をレビューしたものとしては、広瀬(1994)の『環境と消費の社会心理学』がある。第３章「環境配慮行動を規定する要因とは何か－環境問題についての調査研究の概観－」で、既存の理論モデルと、４つの環境配慮行動に関する実証研究をレビューしている。４つのうちの一つはリサイクル行動である。また第 10 章では、従来の行動変容アプローチや態度変容アプローチを広瀬が提案したモデルと関連付けて整理している。

この広瀬のモデルをベースにしつつも、環境配慮行動の普及に焦点をあてて研究動向を整理し、自ら研究を進めているのが杉浦(2003)による『環境配慮の社会心理学』である。第１章「環境配慮行動の普及への社会心理学的アプローチ　－序論－」で既存研究を整理しながら理論的フレームワークを構築し、２章からの実験室実験や社会調査による実証研究を踏まえて、第５章で総括している。杉浦もリサイクル行動等を取り上げている。

こうした社会心理学的なアプローチに対して、マーケティングの視点から、生活者のエコロジー行動の規定要因を整理しているものに西尾(1999)の『エコロジカル・マーケティングの構図』がある。第４章において、デモグラフィック属性、パーソナリティ属性と環境配慮行動との関係についての既存研究を概観し、一貫した結果が得られていないとした上で、心理的な要因について広瀬のモデルとほぼ同様の要因を取り上げて検討している。

リサイクル行動を普及させるための行動変容アプローチに限定してレビューしている論文としては、Porter, Leeming and Dwyer(1995)による"Solid waste recovery A review of behavioral programs to increase recycling"がある。行動直前のメッセージによる働きかけ、コミットメント、環境条件の変更（ゴミ箱を置くなど）、目標設定、などの行動の前に実施するタイプの介入と、情報のフィードバック、報償、ペナルティなどの行動の後に実施するタイプの介入に分けて、それぞれの効果に関する既存研究を整理し、その効果を評価している。

また Huffman, K.T.ら(1995)は、ポイ捨て行動の抑制に関する行動変容アプローチの研究レビューを行った成果を掲載している。

こうした環境配慮行動の規定因や行動変容に関する研究以外に、環境リスク認知に関する研究も多数行われている。これらの研究レビューとしては、中谷内(2003)の『環境リスク心理学』がある。

本書は全体的に研究レビュー的であり、リスクの構成要因である結果と確率に関する認知、ゼロリスク指向、また確率×インパクトとは異なった視点からの分析などにわたり、著者の研究も含めてこのテーマの既存研究を紹介している。

６．社会学分野のレビュー

社会学分野における廃棄物に関する研究レビュー的なものとしては、小松(2000)の論文が挙げられるだろう。廃棄物に関する問題を各種論文から集めて指摘したのち、ごみ減量化への構造的要因・個人的要因について検討しているいくつかの実証研究をレビューしている。また受益圏・受苦圏、加害・被害構造論などの分析枠組みの可能性を指摘している。

その他レビュー論文ではないが、松本康監修・飯島伸子編著の『廃棄物問題の環境社会学的研究』では、一般廃棄物、産業廃棄物の両方を取り上げ、加害・被害構造や責任などさまざまな社会学的な視点から廃棄物問題を分析している。

７．廃棄物学会の総説

以上、各関連する学問分野別にレビューを挙げてきたが、これらに分類しがたいものも存在する。ここでは中でも廃棄物学会誌の総説で、社会・経済部会に関連すると思われるもののみを取り上げて列挙しておく。

・寄本勝美(1994)「公共を支える「民」と公共政策－廃棄物問題への社会対応をめぐる－試論－」、Vol.5，No.1,
・田中勝(1996)「廃棄物リサイクルと収集運搬システム」，Vol.7，No.5
・高月紘(2000)「廃棄物と環境教育・環境学習」，Vol.11，No.3

８．おわりに

以上、社会・経済部会のカバーする研究分野に関連すると思われる研究レビューを学問分野別に列挙した。研究課題とした主要文献情報の整理とはやや異なったが、こうした研究レビューの情報を共有することは、各分野の研究の到達点を共有し、そこから研究を発展させる上で有意義であると考えられる。こうしたレビュー情報の共有を研究部会としてさらに推進していくことができれば幸いである。

【文献リスト】

＜文献リスト・本の紹介＞
・環境庁(1991)『リサイクル新時代』、中央法規
・市橋貴(2000)『BOOK GUIDE－ゴミと暮らしの戦後 50 年史』、リサイクル文化社
・環境法政策学会(1999)『リサイクル社会を目指して』、商事法務研究会

＜経済学＞
・Porter, R.C.(2002)"The Economics of Waste", Resources for the Future（リチャード・Ｃ・ポーター著、石川雅紀・竹内憲司訳『入門 廃棄物の経済学』東洋経済新報社, 2005）
・Powell, J.C., Turner, R.K. and Bateman, I.J.の"Waste management and Planning", Edward Elgar Publishing, Inc.
・山本耕平編著(1985)『現代のごみ問題　経済編』，中央法規
・植田和弘(1992)『廃棄物とリサイクルの経済学』，有斐閣
・細田衛士・室田武編(2003)『循環型社会の制度と政策』，岩波書店
・吉田文和(2004)『循環型社会』、中央公論社
・中村慎一郎編(2002)『廃棄物経済学をめざして』，早稲田大学出版部
・中村慎一郎(2000)「廃棄物の産業連関分析」，Vol.11，No.4
・Jenkins, R.R.(1993)"The economics of solid waste reduction", Edward Elgar Publishing,Ltd
・Miranda,M.L., Bauer, S.D. and Aldy, J.E.(1996)"Unit Pricing Program for Residential Municipal Solid Waste: An Assessment of the Literature, Report prepared for USEPA (http://www.epa.gov/epaoswer/non-hw/payt/pdf/swlitrep.pdf)
・山川肇、植田和弘(1996)「廃棄物 ごみ有料化論をめぐって：到達点と課題」、環境科学会誌９(2),pp.277-292
・山川肇, 植田和弘(2001)「ごみ有料化研究の成果と課題：文献レビュー」, 廃棄物学会誌 Vol.12,No.4 pp.245-258

・Lindhqvist, T.(2000)" Extended Producer Responsibility in Cleaner Production Policy Principle to Promote Environmental Improvements of Product Systems", Dissertation (Lund Univ.)
・淺木洋祐(2002)「拡大生産者責任と廃棄物政策の研究動向と課題」，財政学研究，Vol.30，pp.102-110

＜経営学＞
・長沢伸也・森口健生(2003)『廃棄物ビジネス論』，同友館

＜心理学＞
・広瀬幸雄(1994)『環境と消費の社会心理学－共益と私益のジレンマ－』、名古屋大学出版会
・杉浦淳吉(2003)『環境配慮の社会心理学』、ナカニシヤ出版
・Porter, B.E., Leeming, F.C. and Dwyer, W.O.(1995)"Solid waste recovery A review of behavioral programs to increase recycling", Environment and Behavior, Vol.27, No.2, pp.122-152
・Huffman, K.T., Grossnickle, W.F., Cope, J.G. and Huffman, K.P.(1995)"LITTER REDUCTION A review and integration of literature", Environment and Behavior, Vol.27, No.2, pp.153-183
・中谷内一也(2003)『環境リスク心理学』，ナカニシヤ出版

＜社会学＞
・小松洋(2000)「社会的問題としてのごみ問題－問題の多様性と社会学の役割－」、環境社会学研究、Vol.6、pp.133-147
・松本康監修・飯島伸子編著(2001)『廃棄物問題の環境社会学的研究』、東京都立大学出版会

文責）山川肇